

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218



会報

松門

自然から学ぶ



山口県高等学校長協会理事
山口県公立高等学校長会会長
山口県立岩国高等学校

校長 吉村 洋輔

朝、学校へ出かける前、庭の給餌箱に野鳥へのえさをやることにしている。えさは朝御飯を少し残したものに、釜を洗ったときに出てくる御飯つぶやパンのかけらを混ぜたものである。毎朝のようにやるので、くれるのを待っているらしく、ハシブトガラス、ムクドリ、スズメ、カワラヒワ、シジュウカラ、キジバトなどさまざまな野鳥がそのえさをついばんで行く。しかし、よく見ると大きい鳥から小さな鳥へと順番があるらしく、大きい鳥が食べて逃げるのを、小さな野鳥は遠くの木影でちゃんと待っている。

これが冬場ともなると様子が違ってくる。自然界のえさになるものが乏しくなり、大きな鳥がなかなか逃げてくれないと、小さな野鳥は集団でこれを追っ払ってしまう。また、スズメとチャット鳴き、スズメの鳴き声

と違うのでよく見て図鑑と較べてみると、ウグイスであったりする。あの春に鳴くウグイスの素晴らしい鳴き声からは想像もつかない鳴き声に驚いたりもするのである。いずれにしても、えさをついばむ所作は野鳥によってそれぞれ異なり、愛らしく、興味が尽きない。

しかし、ときにはこんなことも考えるのである。こうして彼らにえさをやるのが、彼らにとつて本当に為になることなのか。野性の厳しさを損ないはしないかと。やはり、ほどほどにというのが良いのかもしれない。

それでも、えさをついばんで飛んで行くとき、どの鳥も「ありがとう」と言って目くばせをしているようで、彼らから学ぶことが多いのである。それに、ある日から不登校の生徒と一緒にえさを与えてくれるようになってきたことである。その子の父親が

何回も訪ねて来て、悩みを聞いてくれるうち、野鳥への給餌の話をして、私の留守中えさをやってくれないかと持ちかけたのがきっかけである。私が用意したえさを彼が給餌箱に入れて、縁側に一緒に座って観察する。

はじめは、学校に行きたくてもどうしても行けない、そういう彼の心の葛藤が痛いほど伝わってきた。それが今では、野鳥を媒体として、段々とものが言えるようになってきており、野鳥に大変感謝しているのである。しかし、まだ、学校へ行かないかとは言えない。

そもそも、野球、テニス、バスケットや音楽など、部活動で苦しい練習に耐えぬいている生徒には心の張りがあり、明るく目が輝いているものである。そういう友達を見て、一層あせりを感じていた彼が、野鳥の観察を通して、小さな動物もそれなりに一生懸命生きている、生きることの喜びを取り、徐々に心の落ち着きを取り戻してきているように思えてならない。私は言いたい。君がそこに居てくれるだけでよい。ともに生きてくれるだけでよいのだよ。あせるな、そのうち、やる気が

でくるよと。
吉田松陰先生も言っておられる、「蓋し情の至極は理も亦至極せる者なり。余常に謂へらく、凡百の事皆情の至極を行へば、仁用ふるに勝ふべからず」と。教育にも不易と流用があるが、

今こそ原点に立ち返って、生きているだけでも良いのだという価値観を基盤として、至誠一貫、仁愛の精神のもとに人間愛を貫いて行く気概が必要である。やがて、ウグイスが美しい声で鳴く頃には、彼も、卓然自立、自らの力で学校へ出てきてくれるようになるのを心から願っている次第である。



第12回松陰教学研究会 (H 9. 11. 29~30)

義烈と奉公



山口県立田布施農業高等学校
教諭 伊藤 敦夫

はじめに

安政五年(一八五八)五月、長州藩は朝廷に忠節、幕府に信義、祖宗に孝道という藩是三大綱領を決定している。この綱領は、幽囚の吉田松陰先生(以下、松陰と記述)の「狂夫の言」・「対策一道」・「愚論」等の一連の上書建白による影響が大きいとされている。天朝に真心を尽くすという理念を据え、藩府が正道を歩むなら、洞春公(毛利元就)以来の志を損なわないというものである。綱領決定の経緯について、『修訂版・防長回天史』(第二編。句読点は筆者挿入)によれば、

十三日、当職益田弾正、急に当役以下諸吏員を自邸に招集して、議する所あり。議に與る者皆曰く、是れ皇国の大事なり。我公にして忠言を薦むれば、上は以て朝廷幕府に対し忠節信義を缺き、下は以て毛利氏の祖宗に対し承順奉仕

の道を失ふなりと。十四日昧

爽弾正登庁、再び其案を議し、周ねく一門の老臣を招集して之が意見を求め、異議なきに及び即夜政之助をして携へて東行せしむ。

とあり、江戸から帰藩中の毛利敬親に国相府案の裁下を求めて、周布政之助を遣わしている。さらに同書中には、

吉田松陰、詩を以て其行を壮にする。当時、政之助と松陰等志士と其議論を上下し、意気頗る相投ず。

とある。『松陰詩稿』中の「周布公輔の東行を送る」の詩の一節には、

周公奮って曰く死は一死のみ、尊に死するは何ぞ国に死するの忠に如かんと。

とあり、藩には松陰の一連の建築が通じ、松陰の意向が反映されていることが容易に推測できよう。

貫徹した命題が数多くある。藩主毛利敬親に尽くした忠義の念もその一つである。本稿では、松陰の愚直なまでの意識を考察してみたい。

一、江家とその伝統

松陰は著述や書簡に江家という語句をしばしば用い、併わせてその伝統を語る。例えば、『丙辰幽室文稿』の「又読む七則」(安政三年十一月二十三日)では、

我が大江氏は源を天潢に分かつ。

として、毛利氏が皇朝の系譜に繋がる大枝(のちの大江)氏に由来するとしている。続いて、吾が父執、林百非翁(林真人)常に余に誨へて曰く、「我が江家は遠く皇統に源し、世々文学を以て天朝を輔けたてまつる。(中略)然らば則ち文武を以て天朝を輔けたてまつるは、実に我が公歴世の任なり。

世々皇室に藩たり。という敬親自らによる発令(九月朔日)の意味が大きい。また、来原良三へは、

節を立て始めを倡ふる、斯れ義士たり。難を救ひ勲を立つる、斯れ忠臣たり。

として、行相府の出仕に赴く友人を督励している。藩主による皇室に藩たりという言葉は、獄中の松陰にとって欣喜雀躍の思いであったことが容易に推察される。藩主への信義が最終的には皇朝への忠節に至り、君臣・臣下の関係が一本化されるからである。そして、長州藩における尊皇の草莽とその崛起論も、この皇室と藩の関係から絶対化されていくと考えるのが妥当であろう。

二、忠義の絶対性

松陰には、どうしても乗り越えなければならぬ使命があった。その使命は、癸丑・甲寅の事変(一八五三年・ペリー来航、一八五四年・和親条約締結)を境として大きな変容を遂げることとなった。藩の兵学教授という形式的使命ではなく、わが国の内憂外患に処する生き方が求められたのである。それは同時に長州藩の進む方向であり、他の雄藩に遅れてはならぬとする悲痛な心の叫びである。そこで、松陰は解決の方向性を忠義の概念に求める。皇朝の系統を有する毛利公へ忠義は、両者(天朝・幕府)を同時に尊崇しても背反せず、大義を誤らないとするのである。事実、松陰は国内外の急速な展開にあっても、自己の極限状況まで諫言的立場を貫いている。あの討幕を明示したとされる安政五年九月九日付の松浦松洞宛書簡で、君側の奸とした水野土佐守を、

一人の奸猶さへ仕し候へば天下の事は定まり申すべく候。と排斥をしているが、その前部には、

(尊王攘夷の素志を相挫き候様)天朝・幕府へ対し奉り相済まざるものに付き、

と記している。また、追伸部には、

天朝尊く幕府重し。

と附言している。

松陰にとつての癸丑・甲寅は、安政元年三月の下田踏海事件となった。この後、野山獄入獄・自宅幽室となり、行動の自由が完全に失われる。しかし、逆境になればなるほど、松陰の心が燃えたぎる。松陰にとつて忠義

の概念は、すでに固定化されていたものであった。安政元年八月、行相府に提出した『将及私言』の「大義」の項には、

普天の下王土に非ざるはなく、率海の浜王臣に非ざるはなし。という、『詩経小雅』（北山篇）を引用し、

天下は天朝の天下にして、乃ち天下の天下なり、幕府の私有に非ず。

とする。この天下論は、幽囚時にますます尖鋭化する。安政三年に限定し、数例をあげてみよう。

まず、兵学門生の齋藤栄蔵（のち松下村塾門生）に松陰が添削結果を意見した『丙辰幽室文稿』中の五月二十三日付の「齋藤生の文を評す」では、

評、天下は一人の天下に非ずとは、是れ支那人の語なり。

（中略）謹んで按ずるに、我が大八洲は皇祖肇むる所にし、万世の子孫に伝へたまひ、天壤と窮りなき者、他人覬覦すべきに非ざるなり。

とし、漢土の禅讓放伐と本邦の皇朝連綿との比較をしている。

次に、臣下の責務は藩主への忠勤であり、勤王僧黙然との往復書簡（八月十八・十九日）に

は、

僕は毛利家の臣なり、故に日夜毛利に奉公することを練磨するなり。毛利家は天子の臣なり、故に日夜天子に奉公するなり。

として、奉公する二つの対象が矛盾せず、一本に絶対化される必要性を強調している。

そして、秋以降は自著『講孟箴記』の評価をめぐり、元明倫館学頭の山県太華と熱い論争をする。太華による「講孟箴記評語」（下の二）では、松陰の天下論（天朝の天下、一人の天下）に対して、

天下は一人の天下に非ずして天下の天下なる理は、我が国といへどもこれあるを知るべきなり。

として、太華は自らの国史観を引用して自説を正当化させようとする。両者の数度にわたる論争では、「天下の天下」等の解釈をめぐって太華の論理に軍配をあげる説が多い。しかし、松陰は尽忠の対象が明確でないなら、藩や我が国の護持が保てないと考えられるため、自説の狭小を問われても、あくまで「一人の天下」に拘泥している。

三、藩主への忠義

安政五年末、学術不純を理由に、再獄の身となった松陰は、

行動の自由を失う。目まぐるしい情勢のなかで、一縷の望みを託して、要駕策（村塾生が三月初旬の藩主参勤の列を伏見で迎え、尊攘派公卿に引き合わせて上落し、勅許を得て幕政過失を正す）を画策する。藩主に寄せ

る想いには、敬慕に値する特別な心情があった。江戸在住の高杉晋作宛書簡（二月十五日以前）には、追懐の一念が溢れ、

小子今公様への忠心止む能はざるは抑々故あり。小子幼年より深く御知遇を蒙り、往年は御前会にも妻々召出され親しく德音を伏聴仕り、一々肺肝に徹し候。

とし、その続きには（東北）亡命・墨夷行（下田踏海）があつても、上書建言を許された恩義に感謝している。

したがって、ずっと諫言や諫死を考へ続けてきた松陰は、藩主を勤王の魁に奉ることが、天朝への報いとす。想像に難くない悶々たる心情も、再獄中という特異な状況を考慮するならば、以下の事例も背徳たり得ないと思われる。東送までの安政六年の書簡のうち、藩主への落

胆ぶりと思われるものを拾つてみよう。

父百合之助との往復書簡（三月二日）には、御発駕も彌々五日の由、道も道義もなき世の中に相成り、一日生き居り候事もうるさきことに存じ奉り候。

としている。同月の入江杉蔵宛書簡（二十日）には、君心已折の四字、幾度思ひ返しても腹が立つてならぬ。

とある。別の杉蔵宛書簡（四月二十二日頃）の「自然説」に、吾が公に尊攘をなされよといふは無理なり。尊攘の出来る様なことを拵へて差上げるがよし。

と、尊攘の方法に論及したのももある。これら以外に、この時期の著述にこの類の記述が見られぬこともないが、先の書簡同様に感情の直截表現のみに終止している。内憂外患に加えて再獄という二重の苦難、村塾の同志結合を唱えるとき、短慮の至りでなく、あくまで忠義の念は失われていないのである。

逆に、本藩の誇りと藩主への報恩も多く記している。このうち、草莽論に固執した四月初旬、有名な北山安世宛書簡（七日付）

には、

されど本藩の恩と天朝の徳とは何如にしても忘るるに方なし。草莽崛起の力を以て近くは本藩を維持し、遠くは天朝の中興を輔佐し奉れば、匹夫の諒に負くが如くなれど、神州に大功ある人と云ふべし。

として、自説の正当性と長州藩の誇りを他藩人に力強く示している。また、杉蔵との獄中往復書簡（五月中下旬）には、杉蔵が、

我が君公は尊攘の御志は毛頭之れなく、と師に寄せている。書簡中の行間に松陰の文字が記されているが、この部分には松陰の筆致がない。要駕策挫折に伴う藩主発駕に自身の気魂が失われたという種類の表現はあるが、松陰には塾生の激烈な一言に値するような記述が残っていない。それは、推論の域になるが、『講孟箴記』（梁惠王上・首章）にある「義を後にして利を先にする」

ような生き方を、松陰が求めてこなかった誇りに起因するのではあるまいか。また、生涯にわたり、藩主に尽くし続けた忠義にも通じる敬慕の想いに拠るのではあるまいか。

第十二回松陰教学研究会

平成九年十一月二十九日(土)
十一月三十日(日)

於 鳳荘(山口市楠木町二一三十八)

一 開催趣旨

これからの学校教育推進上の重要課題の中に、学校が児童・生徒のために「真の学び舎」になっていくことにあると指摘されています。そのためには何をどうすべきかを明らかにしていくことが大切となりますが、とりわけ教育は人に在りと言われていますように、人に視点をおかなければなりません。

「真の学び舎」を創出するためには、先ず教育に対する意識づくりに取り組むことが必要となります。

幸いに私共は、誇り高い防長の教育風土と実践の歴史を共有しています。中でも、松下村塾における松陰の教育こそは、教育の原点でありこれこそ「真の学び舎」であります。特に、先覚松陰の時代を超えた不易・不滅の教育と、汲めども尽きない深奥な人間像に学ぶことは、現下の教育課題としての「真の学び舎」づくりのために緊急不可欠なことと考え、ここに第十二回松陰教学研究会を開設します。

第一日

1 開講式

九：三〇～九：五五



主催者あいさつ
財団法人 松風会 理事長 松永祥甫

2 来賓

山口県教育庁 指導課長 倉増誠彦様
山口県中学校長会 常任幹事 土肥一郎様

来賓の皆様



山口公立高等学校校長 副会長 竹田信義様
山口県小学校長会 副会長 藤原董剛様
竹田校長 藤原校長 倉増課長 土肥校長

3 講義

10:00～12:00

教育者松陰の真髄



元山口県立山口博物館長 松風会理事 石原啓司先生

4 講義

13:00～14:30

夢と知恵を育む山口県教育の推進
～吉田松陰に学ぶもの～



山口県小学校長会長 山口市立白石小学校長 見好豊先生

5 演習・発表・協議

一四：四〇～一七：三〇

松陰に学び教育を興す

研究発表

14:40～16:20

人が人として生きるために
必要な力を育む方途とは



～松陰先生の残された書簡などをもとに考える～
萩市立萩東中学校 小野和哉先生

第二日

6 情報交換

一八：〇〇～二〇：〇〇



7 意見交換

九：〇〇～一〇：二〇

「夢と知恵を育む」教育の創造

8 講義

10:30～12:00

現代教育と吉田松陰
～士道に学ぶ～



山口県立大学名誉教授 松風会理事 河村太市先生

9 閉会行事

二：〇〇～二：二〇

二日間にわたる研究会が終わって、出席者から次のような所感をいただきましたので、掲載してお礼にかえます。

さて、先日の松陰教学研究会におきましては、大変有意義なときを経験させていただきました感謝いたしております。

松陰については殆ど無知な者でしたが、研究会への参加が決まり何冊か本も読みましたが、講師の先生方の機微に渉る講義には到底比較できません。

今なお影響力を持つ松陰の怖いまでの深求心・先見性・洞察力・実行力そして優しさなどにふれ、ますます引かれるような気がいたします。すばらしい研究会に感謝いたします。

さて、11月29日(土)30日に開催されました第12回松陰教学研究会に参加させていただいて、御指導賜り誠にありがとうございました。

おかげさまでやっと松陰先生の門までたどりつくことができました。前々から、山口県民でもあるし、現在の日本の社会が明治維新と同じ状態であることから、松陰先生のことについて学び学校経営にも取り入れたいと思っていました。しかし、浅

松陰教学研究会に参加して

その一

学非方な私には、吉田松陰撰集を買っても、なにしろ難しくて近づくことができませんでした。

今回の最大の収穫は、私の一番好きな言葉である「至誠」についての松陰先生の深い思いがわかったことです。非常にうれしく思いました。これから自信をもって使わせていただきます。

又、石原啓司先生や河村太市先生の吉田松陰撰集をつかわれたの講義も非常に感銘しました。欲を言えば先生方にもう少し

長く講義していただき、松陰先生のことを勉強ができるとうかつたと思いました。

来年は、吉田松陰撰集を使われての講義をまる二日間で四講座くらいを希望します。

最後に、この会で学んだことを、私なりに少しでも学校や地域に広めていきたいと思えます。

その三

松陰教学研究会を終えて帰る道々、吉田松陰について思いを巡らしながら帰りました。心ひかれる人でした。

松陰の生きた時代と今日では、人心・情報量・地球規模で生きる時代、主権が国民にあることなど多くの違いがあります。その違いを越えてなお、私たちの

心を引き付けるものは何だろうか。

道元の教えを自分が生きる指針としておりました私は、「松陰先生に学ぶ」を調べ読みしているうちに、道元の教えに似通っている部分をたくさん見付けました。読書家であり勉強家であつた松陰は、多くの聖人や賢人に

学び、その中から自分の有り様を見付け、信念をもって力強く生きた人ではないかと想像しました。

私は自己を振り返り精進しようとして努力しているものの、禽獣に近きわが心のあることを恥ずかしく思う毎日です。松陰先生は「聖人や賢人に阿らぬこと」と言っておられますが、これまでの自分は追従する気持ちばかりが強く、程遠い道にがっかりするばかりでした。これを機会によく考えてみたいと思っております。

今、吉田松陰撰集の講義を受け、もっと指導を受けたかったという思いです。これから時間をかけて、自分でじっくり読んでみようと思っております。

このような勉強の機会を自ら求めて参加しましたが、これからの毎日の過ごし方に多くの示唆を受けました。価値ある本に出会うことができました。何よりも、松陰先生の教えを、混迷する教育界への光として懸命に努力しておられる方々に出会えたことに感謝します。ありがとうございました。

その四

日本亡国につながるようなモラルの欠如が多く見られるなど混沌とした現代社会においては、知識や技術の習得だけでなく、四端の心が必要であること、四端の心を養うため、江戸時代における 時の士道に光をあてて学び合い、身につけ合うことが大切であることを改めて認識しました。

特に、講義の中の「仁は人の心なり、義は人の路なり」「われは、人に勝れるものはないけれど、人に語れないことはしてない」ということについては、人を教え諭す立場に立つ者は、高潔さをもつことが必要不可欠であることを改めて実感することもできました。

講義の中でできた「仁は人の心なり、義は人の路なり」をいかに日本の将来を担う子供たちに、どういう場面を通して養うことができるかについて、道

徳に視点を置き考えてみました。今行っている、結論が曖昧な道徳で果して「仁は人の心なり、義は人の路なり」を養うことができるのであろうかと疑問を感じる。

なぜそう思うか、それは、現代の10代、20代などを中心としたモラルの低下、凄惨な事件の多発、自分の学校の校歌・自分の国の国歌を堂々と歌えないなどの情ない現実があるからです。では、現在の道徳教育をどうすればよいか、自分が従前より描いている一つの構想をごく簡単に述べてみます。

それは、現在の道徳指導のように、指導過程において結論を言わず、子供たちが考えを述べ合っていく中で、気づき考えていくことで道徳性の向上を目指すものだけに力点を置くのではなく、孟子や講孟余話などに出てくる人間が生きていく上での不易な路、すなわち、四端（仁義礼智）を深く見つめることのできる、答えのある道徳を取り入れていき、両輪で道徳性の向上を目指すものであります。

ここで述べた構想の達成には、現代の道徳教育の枠では、かなり無理があります。そこで、道

徳の授業時間を大事にして道徳性を養うことを積み重ねながら、教師や特別活動等全教育活動を通じて、孟子や講孟余話に見える四端（仁義礼智）に沿った行いをするこの大切さに気づかせ、考えさせたり、教え諭す教育をしていくことが重要と考えます。

この考えに対しては、立場によってそれぞれの意見があろうかと存じます。がしかし、今、世の中に発生している状況を見たととき、四端（仁義礼智）の心の重要性を認識することは急務であると確信します。

その五

帰りましてもう一度講義録を見直し、松陰先生の偉大さ、見識の深さに、改めて（河村太市先生の講義の中にありましたが）「参った」という気持ちを感じざるを得ませんでした。山口県人であるからには、県出身の偉人の誰か一人はとことんまで知っておきたいと始めた松陰研究ではあります。益々その気持ち

を強めました。

一歩でも二歩でも松陰先生に近づきたい、また是非参加して自分自身を高めたいと考えています。

平成十年度松風会研修計画

第三回松陰研修塾基礎コース 第二年次年間研修計画

一趣旨

吉田松陰の生涯は、至誠留魂の気節とその実践に貫かれたものであり、松陰は今なお不滅の光を放ち、本県の誇る偉大な歴史の逸材である。

松陰の生き方は、時代を越えて常に課題解決の指針を示唆し、くめども尽きない深奥な人間像とともに、限らない探求が今日望まれている。

現代社会に生きる人間を取り巻く環境の急激な変化に伴い、主体としての人間の在り方があらためて問われている時、松陰の精神的遺産に学び自らの資質向上に努めることは極めて重要である。

よってここに、松陰に学び教育を見直す基礎的研修を志す者の為に本コースを開設する。

二主眼 人間吉田松陰に学ぶ

～教育者松陰～

三主催・主管 財団法人松風会

共催 山口県小学校長会 同

中学校長会 同高等学

校長協会 財団法人山口県教育会
山口県教育委員会・山口市教育委員会・萩市教育委員会

四研修課程 三カ年在塾・年間三回研修

1 第一回 平成10年6月27日(土)

山口県教育会館第二研修室

(1)開会式 九：五〇～一〇：〇〇

(2)講義 松陰の師

～佐久間象山～

一〇：〇〇～二：〇〇

(指)山口県立大学名誉教授

松風会理事河村太市先生

(3)講義 幕末の国際情勢と

松陰の国際感覚

一三：〇〇～一五：〇〇

(指)元山口県立山口博物館長

松風会理事石原啓司先生

(4)発表・座談会 一五：二〇～一七：〇〇

「松陰先生に学ぶ」自分にとって大切なもの、その生かし方

～塾生による～

かし方

(5)閉会式・オリエンテーション

一七：〇〇～一七：二〇

2 第二回 平成10年8月29日(土)

8月30日(日)宿泊研修

会場 萩青年の家

萩青年の家

第一日 (8月29日)
(1)入所式・オリエンテーション 九：三〇～一〇：一〇

(2)講義 藩校明倫館の教育 一〇：二〇～一二：二〇

(指)元山口県立山口博物館長

松風会理事石原啓司先生

(3)巡検 明倫館(明倫小学校) 一三：〇〇～一四：〇〇

(指)元山口県立山口博物館長

松風会理事石原啓司先生

(4)講話 明倫小学校の教育実践 一四：一〇～一五：〇〇

(指)萩市立明倫小学校校長

梅地信吾先生

(5)巡検 塾生の自主企画 一五：一〇～一六：四〇

(6)夕の集い

(7)発表・座談会 一六：三〇～二：〇〇

「松陰先生に学ぶ」自分にとって大切なもの、その生かし方

～塾生による～

第二日 (8月30日)

(1)朝の集い

(2)講義 吉田栄太郎と三生 八：五〇～一〇：二〇

(指)元萩市立指月中学校長

松陰研究家松田輝夫先生

(3)講義 萩における松陰の指導者 一〇：三〇～二：〇〇

(指)萩松朋会松陰に学ぶ会主宰 松陰研究家

末永明先生

(4)講義 防長の教育風土 ～その形成と伝統～ 一三：〇〇～一五：〇〇

(指)山口県立大学名誉教授

松陰研究家河村太市先生

(5)発表・座談会 一五：二〇～一六：〇〇

「松陰先生に学ぶ」自分にとって大切なもの、その生かし方

～塾生による～

(6)退所前の整理・退所式・オリエンテーション 一六：〇〇～一七：三〇

3 第三回 平成11年1月23日(土)

山口県教育会館第二研修室

(1)開会式 九：五〇～一〇：〇〇

(2)講義 松陰の人間観 一〇：〇〇～一二：〇〇

(指)元山口県立山口博物館長

松風会理事石原啓司先生

(3)講義 松陰の教育実践 一三：〇〇～一五：〇〇

(指)山口県立大学名誉教授

松風会理事河村太市先生

(4)発表・座談会 一五：二〇～一六：四〇

「松陰先生に学ぶ」自分にとって大切なもの、その生かし方

～塾生による～

(5)閉会式・オリエンテーション 一六：四五～一七：〇〇

五中心資料 吉田松陰撰集 山口県教育史 松陰先生に学ぶ

寄与することを祈念しつつ、共

第一回松陰研修塾自主研究コース 第二年次研修計画

一趣旨

子供たち一人一人は、本来生命力に満ち夢と希望に輝くかけがえない存在である。この子供たちに我々は未来を託すのである。彼等の自己教育力を支えし、彼等の可能性が豊かに瑞々しく開花することを熱望してやまない。

今日、教育を取巻く環境にはまことに厳しい現実があり、山積する課題や憂慮すべき事態も多い。幸いに、防長の先人たちは積み重なる極度の艱難に正対して、常に人材の育成を重視して展望を開くことに努めてきた誇り高い教育風土を今日に伝えている。

即ち、藩校明倫館を頂点に幅広い教育基盤を形成し、多様な教育活動が展開されて時代を拓いてきた。とりわけ慕いよる若者たちの誘掖に明けくれた松陰主宰の松下村塾での教育は、教育の原型として今もなお不滅である。この不易の教育精神について遺文の研究を通して学びと、山口県教育の更なる振興に

同研究を推進する。

二 主題

松陰教学の神髄に学び

明日の教育を拓く

三 主催・主管 財団法人松風会

共催 山口県小学校長会 同

中学校長会 同 高等学校

校長協会 財団法人山

口県教育会

後援 山口県教育委員会 山

口県市教員委員会協議

会 山口県町村教育委

員会協議会

四 研究課程

三ヶ年在塾 毎年四回研究会

中心資料○吉田松陰撰集

○山口県教育史

○孟子

補助資料○松風会で準備する

五 研究方法

1 指導者を中心に遺文を読

み深め、全員で協議し共

同研究を進める。

2 松陰ゆかりの地を訪問し

て現地研究を進める

六 第二次(平成十年度)

年間研修計画

1 第一回

平成十年五月二十三日(土)

九：五〇～一七：〇〇

会場 山口県教育会館五階

第二研修室

○吉田松陰撰集の「講孟余話」

を「孟子」と対比しつつ読み

深めることを通して、自らの

松陰像を確かなものにする。

下田踏海に失敗した松陰は、

やがて野山獄中の人となるの

であるが、野山獄を獄友相互

の修養道場にしようと考えた。

松陰は、「孟子」を同囚と

読み、道を求めていくことを

楽しもうとすることからはじ

めている。

やがて、杉家幽囚の身となっ

た後も家族や親族とともに講

読が継続された。

この「講孟余話」は、安政

三年六月十八日遂に一書にま

とめられる。

本書によって、松陰の人生

観・国家観は勿論政治・教育・

外交・哲学等の各方面にわた

る思想並びに、読書の態度・

学問の方法等をうかがうこと

ができる。

①文献解題・講孟余話 50～54

(堀)元山口県立山口博物館長

松風会理事 石原啓司先生

②講孟余話 55～57

(堀)山口県立大学名誉教授

松風会理事 河村太市先生

2 第二回

平成十年八月十七日(月)

同 十八日(火)

長崎・平戸方面の調査研究

大型バス 一台 四十名

○松陰の九州遊歴の実際とそ

の意義を探索することが主旨

的で、資料としては、「西遊

日記」及び関連資料があり、

これを事前に個人研究してお

くことが何より大切である。

○藩の元老村田清風に「四峠

の論」がある。城下萩から四

峠の一つを越えて出遊しない

ことには、天下の大勢はつか

めないというものである。

松陰は、嘉永二年(一八四

九)、山鹿流と山田亦介の意

を体し「水陸戦略」を書き、

北浦沿岸を須佐から赤間関ま

で視察した。

続いて翌嘉永三年(一八五

〇)八月二十五日、家学の一

方の宗家(当時山鹿流は江戸

にも宗家があった)山鹿万助

および平戸藩士葉山佐内を訪

ねるために九州遊歴の旅に出

発した。

松陰の残した「西遊日記」

は、各城下の土風や沿道の様

子から民政にまで及び「……

発動の機は周遊の益なり」と

その序に書いたとおり、松陰

の心を動かさずにはおれなかつ

た。

これから下田踏海の挙まで

続く遊歴は必ず記録にとどめ、

書斎で学ぶことのできない多

くの収穫と開眼に寄与した。

文豪スティーブソンの

「Yoshida Torajiro」の中

で「中世(鎖国日本)から十

九世紀へと発見の旅を続けた」

と書いたのは的格な表現であ

る。

平戸滞在五十余日、松陰は

葉山その他から借りたアヘン

戦争や海外事情、国防策など

の新聞書をむさぼるように読

み、また抄録した。長崎でも

二十日間これに費やし、「西

遊日記」は読書録に感を呈す

るほどである。

九州遊歴の道中では、赤間

関の伊藤静斎、長崎の擲幹介、

佐賀の草場佩川・竹富文之助

その他文武知名の士を訪い識

見を高めている。

特に、熊本では同学の土宮

部鼎蔵との運命的出会いを含

めて、十二月二十九日に終わっ

たこの遊歴は松陰のこれから

の生き方を決定したと見てよ

い。

(堀)山口県立大学名誉教授

松風会理事 河村太市先生

元山口県立博物館長

松風会理事 石原啓司先生

3 第三回

平成十年十月二十四日(土)

九：五〇～一七：〇〇

会場 山口県教育会館

○吉田松陰撰集の「講孟余話」

を「孟子」と対比して読み深

める。

講孟余話 58～65

(堀)山口県立大学名誉教授

松風会理事 河村太市先生

元山口県立山口博物館長

松風会理事 石原啓司先生

4 第四回

平成十一年二月十三日(土)

九：五〇～一七：〇〇

会場 山口県教育会館

○吉田松陰撰集の「講孟余話」

を「孟子」と対比して読み深

める。

講孟余話 66～72

(堀)山口県立大学名誉教授

松風会理事 河村太市先生

元山口県立山口博物館長

松風会理事 石原啓司先生

第十三回松陰教学研究会

平成十年 十一月二十八日(土)

十一月二十九日(日)

研修内容 吉田松陰の教育とそ

の本質・現代教育と吉田松陰

序章「吉田松陰の生涯」
序 吉田松陰とその家族 4～7頁

- (一) 生いたち
- (二) 杉家の家法
- (三) 兄と叔父玉木文之進

第一節 兵学修業 8～15頁

- (一) 兵学師範・明倫館教授
- (二) 藩校明倫館
- (三) 藩主毛利敬親と松陰

第二節 遊歴 16～33頁

- (一) 九州遊学
- (二) 松陰と旅

吉田松陰撰集の構成

脚注
解説

- (三) 江戸遊学
- (四) 佐久間象山と松陰
- (五) 東北遊歴(亡命)
- (六) 第二回江戸遊学
- (七) 下田踏海
- (八) 幕末の長州藩

第三節 野山獄・幽室 34～39頁

- (一) 野山獄

松陰遺文編の概要

※□及び○の
数字は遺文番号

第一章 兵学修業 ①～⑤

松村文祥を送る序(未忍焚稿) 平田先生に与える書(未焚稿) ほか三篇

第二章 遊歴 ⑥～⑭

第一節 九州遊学 ⑥～⑪
西遊日記序ほか二篇 兄杉梅太郎宛(書簡)・上書各一篇 家兄に与ふる書(未焚稿) 一篇

第二節 第一回江戸遊学 ⑫～⑬

叔父玉木文之進宛(書簡) ほか一篇

第三節 東北遊(亡命) ⑭～⑲

東北遊日記・序ほか五篇

第四節 諸国遊歴・第二回江戸遊学 ⑲～⑳

兄杉梅太郎宛(書簡) ほか二篇 上書一篇

第五節 下田踏海前後 ㉒～㉓

長崎紀行四篇 書簡二篇 回顧録一篇

回顧録附録三篇 松陰詩稿一篇

第三章 野山獄・幽室 ㉔～㉕

第一節 野山獄 ㉔～㉕

父杉百合之助(書簡) ほか三篇 野山獄文稿より五篇 幽囚録及び幽囚録附録より三篇 野山雑著より二篇

第二節 講孟余話 ㉖～㉗

講孟余話序ほか講孟余話二十一篇 大華山県先生に与えて講孟節記の

序章「吉田松陰の生涯」

- (三) 松陰と山鹿流兵学

第四節 松下村塾 40～49頁

- (一) 松下村塾

- (二) 松下村塾の教育
- (三) 憂国の情
- (四) 吉田松陰の尊主思想
- (五) 松陰と 嚶鳴社グループ

第五節 野山再入獄 50～51頁

- (一) 東送

第六節 殉難 52～59頁

- (一) 松陰処刑
- (二) 松陰処刑
- (三) 松下村塾グループ

松陰遺文編の概要

評を乞ふ書(野山獄文稿) 一篇

第三節 丙辰幽室 ㉗～㉘

自ら松柳の詩の後に書す(丙辰幽室文稿) ほか六篇 黙霖との往復(書簡) 一篇 武教全書講録一篇 松下村塾聆一篇

第四章 松下村塾 ㉙～㉚

第一節 丁巳幽室 ㉙～㉚

秀実、字は無逸の説(丁巳幽室文稿) ほか八篇 烈婦登破の碑・孫子評註各一篇

第二節 戊午幽室 ㉛～㉜

岡田耕作に示す(戊午幽室文稿) ほか十篇 清水図書宛(書簡) ほか一篇 西洋歩兵論一篇

第五章 野山再入獄 ㉝～㉞

第一節 絶食求死 ㉝～㉞

高杉晋作ほか四名より(書簡) ほか十篇 無逸に与ふ(己未文稿) ほか三篇

第二節 伏見要駕策 ㉟～㊱

要駕策(己未文稿) ほか六篇 品川弥次郎宛(書簡) ほか九篇

第六章 殉難 ㊲～㊳

第一節 東行前 ㊲～㊳

諸妹宛(書簡) 一篇 肖像自賛(東行前日記) ほか三篇 五月二十五日(縛吾集) ほか一篇 涙松集一篇

第二節 江戸獄 ㊴～㊵

高杉晋作宛(書簡) 三篇

第三節 処刑 ㊶～㊷

父叔兄宛(書簡) ほか二篇 留魂録絶筆・辞世各一篇

吉田松陰の研究方法はいろいろありますが、例えば、はじめて取り組まれる方には、次のようなことはどうでしょうか。

1. 721頁からの年譜で確認しながら、序章を読み全体像をつかむ
2. 撰集の構成を参考に、序章ノ

- と遺文を関係させて、更に読み深める
- 3. 撰集の759頁の参考文献等を併用して、研究を深める等